

川崎ジュニア文化大賞

夢へとつながる一歩

中野島小学校 5年生 鈴木 紗知

うれしい気持ちと悲しい気持ちの中、私は自分の髪の毛にハサミを入れた。私は、二年生の頃、おばあちゃんが大きな病気であることを知った。元気だったおばあちゃんが病気になってしまい、胸がズキズキと痛くなった。おばあちゃんは、治りようで髪の毛がぬけてしまい、ウィッグをつけるそうだ。女性にとって髪の毛というのはとても大切なものだと思う。だからおばあちゃんは、ぬける前の自分に少しでも近づきたくてつけることにしたそうだ。ウィッグをつけることは決してうれしいことではなかったと母から聞いた。私の髪の毛なら少しでも喜んでくれるのではないかと色々と調べてみたが、たとえ私が寄付してもおばあちゃんの手には渡らないらしい。それでも、おばあちゃんのように悲しい思いをしている人が大勢いることを知り、自分にも何かできることがないかと思うようになっていった。そんな時に「ヘアドネーション」という言葉と出会った。

ヘアドネーションとは、三十一センチ以上の髪の毛を小児がんや、脱毛症の子ども達のために、寄付することだという。三十一センチ以上の髪の毛を伸ばすには、時間と手間がかかるため、自分にできるのかとても悩んだ。けれど、おばあちゃんと同じように病気とたたかっている人達を「笑顔にしたい」という気持ちが私をつき動かしたのだ。

女性にとって髪の毛は大切なもの。寄付するなら「サラサラできれいな髪を送りたい。」私は毎日欠かさず、しっかりシャンプーやトリートメントをし、ていねいに洗い、乾かすことを心がけ続けた。また、髪の毛が長くなってくると絡まってしまうので、オイルをつけたり、とかしやすいくしを探したりして、サラサラになるまでとかすことも続けた。

ちょうど二年がたった頃、ようやく三十一センチまで髪が伸びた。色々なヘアアレンジができるようになると、心が踊るほどうれしくて楽しかった。それがもうできなくなると思うと少しさみしい。けれど、ヘアドネーションをするために伸ばしてきたので、心の準備はできていた。そして私は、ヘアドネーションをしてもらえる美容院を探した。けれど、なかなかすぐに引き受けてくれる所は見つからなかった。「また今度にしよう」とあきらめかけていた時、最後に電話をかけた美容院で、「今からなら大丈夫ですよ」ところよく引き受けてくれたのだ。私は急いで身じたくをし、かけこんだ。

髪の毛を束にしてもらっている時、私は辛い思いをしている人のためにようやく自分の髪の毛を寄付できるという、うれしい気持ちの反面、長い間伸ばしケアし続けてきた愛着のある長い髪の毛を手ばなすことに、さみしさも感じていた。けれど、鏡にうつった自分のきれいな髪を見て、私は決意した。お世話になった美容院では

束にしてもらった髪の毛を自分で切らせてもらえるそう。手の平がじんわりと汗ばんでいる。私は自分の髪にハサミを入れた。美容師さんは切り取った髪の毛をそっと私の手の平に置いくれた。私はその束を見つめながら、「これでやっと辛い思いをしている人達に送ることができる。伸ばしてきて良かった」と充実感と達成感で胸がいっぱいになり、自然と笑みがこぼれた。

私の髪の毛は誰に届くのだろう。受け取った人は、喜んでくれているのだろうか。私の髪の毛のゆくえがとても気になる。簡単には笑顔になれないかもしれないけど、私の思いが伝わってほしい。

私の将来の夢は看護師になること。ヘアドネーションを通して、いつも積極的になれずにいた私の心のからを破る、一歩をふみ出せたと思う。そして、挑戦したことで、「笑顔や勇気を与える人になりたい」という気持ちが、よりいっそう強くなった。この小さな一歩は、きっと私の未来につながっている。